のろのろ砲弾の驚異

——金博士シリーズ・1——

海野十三

1

今私は、一人の客人を伴(ともな)って、この上海(シャンハイ)で有名な風変(ふうがわ)りな学者、金博士(きんはかせ)の許へ、案内していくところである。

博士の住居(すまい)が、どこにあるか、知っている人は、ほんの僅かである。人はよく、博士が南京路(ナンキンろ)の雑閙(ざっとう)の中を、擦(す)れ切った紫紺色(しこんしょく)の繻子(しゅうし)の服に身体を包み、ひどい猫脊(ねこぜ)を一層丸くして歩いているのを見かけるが、博士の住居を知っている者は、殆んどない。

金博士の住居は、南京路でも一等値段がやすく、そして一等繁昌(はんじょう)している馬環(ばかん)という下等な一膳飯屋(いちぜんめしや)の地下にあるのだ。

「さあ、ここがその馬環です。どうです、たいへんな繁昌でしょうが」と私は、客人をふりかえった。「足の踏み入れようもないというのが正(まさ)にこの店のことだが、第一このむーんとする異様な匂いには、慣れないものは大閉口(だいへいこう)で、とたんにむかむかしてくる。だが、とにかくこの中へ入っていかねば、博士に会えないのだから、一時鼻をつまんで、息をしないようにして、私についていらっしゃい。邪魔になるお客さんは、遠慮な

く突きとばしてよろしいのである。お客さんは、突きとばされて丼（どんぶり）の中に顔を突込（つっこ）もうと、誰も怒るものはいないであろう。遠慮していれば、いつまでたっても、奥へ通れない。さあ遠慮なく、こうして突きとばすですな。しかし懐中物（かいちゅうもの）だけは要慎（ようじん）したがいいですぞ。突きとばされるのを予（あらかじ）め待っていて、突きとばされると、とたんにこっちの懐中物を失敬する油断のならぬ客がいるからね。あれっ、もうやられたって。ああ待った。もうさわいでも駄目です。一度やられると、たとえやった犯人の顔がわかっていても、二度とお宝（たから）は出て来ないのです。さわぎたてると、どうせ

ろくなことにはならない。また何か盗（と）られます。生命（いのち）などは、盗られたくないでしょうから。

さあ、ようやく奥へ来ました。ここには小房（しょうぼう）が、いくつか並んでいる。こっちへ来てください。ここへ入りましょう。はいったら入口のカーテンを引きます。さあ、椅子に腰をおかけなさい。そして、両手でこの大きな円卓子（まるテーブル）を、しっかりと抑（おさ）えていてください。しっかりつかまっていないと、あとで舌を嚙（か）んだり、ひっくりかえって腰をうったりしますよ。はい、今うごきます。秘密の釦（ボタン）を今押しましたから。そら床もろとも、下（お）りだしたでしょう。しっかり卓子につか

まっていなさいといったのは、ここなんだ。そうです、この小室全体が、エレベーター仕掛になっているのです。床も天井も壁も、一緒に落ちていくのです。もう今はたいへんなスピードで落ちていますよ。なにしろ、これがエレベーターなら、地階三十階ぐらいに相当する下まで下りるのです。なにしろ、地面から測って、二百メートルもあるそうですからね。

爆撃をさけるためですかって。もちろんそれもありましょうが、もう一つの理由は、金博士は宇宙線を極度に避けて生活していられるのです。あの宇宙線なるものは、二六時中、どんな人間の身体でも、刺し貫

いているので……」

話の途中に、エレベーターは停(とま)った。

私は客人の手をとって、エレベーターを出ると、しばらくは真の闇(やみ)の中の通路を、手さぐりで歩いていった。

二百メートルばかり歩いたところで、通路は行き停りとなる。そこで私は、今切り取ったばかりのような土の壁を、ととんとんと叩いた。すると、ぎーいと音がして、私たちは眩(まぶ)しい光の中に、放り出された。

そういう段取(だんどり)になれば、私は間違(まちがい)なく、闇の迷路(めいろ)をうまく選(よ)り通ってきたことになるのである。下手をや

れば、いつまでたっても、この光の壁にぶつからないで、しまいには、進むことも戻ることもならず、腹が減って、頭がふらふらになる。

　私は、はげしい目まいをおさえて、しばらく強い光の中に、うつ伏(ぶ)していた。土竜(もぐら)ならずとも、この光線浴(こうせんよく)には参る。これも博士の警戒手段の一つである。

　私は、ようやく光になれて、顔をあげることが出来た。

「やあ金博士。とつぜんでしたが、ロッセ氏を案内して、お邪魔(じゃま)に参(まい)りました」

「ほう、その人は、英国人(えいこくじん)じゃないだろうな。英国人

なら、ここには無用だから、さっさと帰ってもらおう」
と、金博士は、大きなウルトラマリン色の色眼鏡(いろめがね)を手でおさえながら、椅子のうえから立ち上ったのであった。

2

博士は、大の英国嫌いである。英国人と酒とは、大嫌いであった。

「ああ博士。ロッセ氏は日本人です」

「本当か、綿貫（わたぬき）君。氏は、日本人にしては色が黒すぎるではないか」

綿貫とは、私の名前だ。

「氏は、帰化（きか）日本人です。その前は、印度（インド）に籍（せき）がありました」

「どうぞよろしく」

ロッセ氏は、流暢（りゅうちょう）な日本語で、金博士にいんぎんな挨拶（あいさつ）をした。

博士は、無言のまま肯（うなず）いて、私たちに椅子を指すと、自分は再び椅子に腰をおろした。私たちの囲んだ机の

上には、何をやっているのか分らないが、夥(おびただ)しい紙片(しへん)が散らばっていた。そして紙片の上には、むずかしい数字の式が、まるで蟻(あり)の行列のように、丹念(たんねん)に書き込んであった。

「きょうお連れしたロッセ氏は、電気砲学の権威です」と、私は紹介の労をとって、「ロッセ氏は、三ケ月程前に、初速(しょそく)が一万メートルを出す電気砲の設計を完成されたのですが、残念にも、今日本では、それを引受けて作ってくれるところがないために、すっかりくさってしまわれたんです。それでこの上海(シャンハイ)へ、憂鬱(ゆううつ)な胸を抱いて、なにか気分をほぐすものはないかと、遊び

に来られたのですが、私は、博士を御紹介するのがよいと思ったので、実は、ロッセ氏には事前に何にも申さないで、とつぜんここへお連れしたわけですから、どうぞ話相手になってあげていただきたい」
私が思いがけなくすっかり底を割ってしまったので、ロッセ氏は、私の話の途中、いくたびも仰天して、私の袖をひいて、話をやめさせようとしたほどであった。
博士は、かるくうなずいていたが、私の話を聞き終ると、
「それは、くさるのも無理ではない」
と、同情の言葉を洩らし、

「わしは、あなたがロッセ氏であることは、今綿貫君の紹介で初めて知ったわけだが、しかしあなたのことは、電気砲の論文を読んで、前から知っていたよ」

と、たいへんいい機嫌（きげん）の様子で、立ち上ってロッセ氏の黒い手を握った。

ロッセ氏の面上（めんじょう）には、いたく感激の色が現れた。

「だが、ロッセ君。そんなに初速の早い電気砲をこしらえて、どうするつもりなんかね」

「これはしたり、そのような御たずねでは恐れ入ります。初速の大きいことは、すなわち射程（しゃてい）が長いことである。しからば、われは敵の砲兵陣地（ほうへいじんち）乃至（ないし）は軍艦の射

程外にあって、敵を砲撃することが出来るのです。こんなことは常識だと思いますが……」

と、ロッセ氏は、羞らいながら応えた。金博士からメンタルテストをされたように感じたからであろう。

「そういう考えじゃから、命中率はだんだん低下し、砲弾代などが、やたらにかかるのじゃ。射程には、自ら限度がある。ただ砲弾を遠方へ飛ばすだけなら、射程をいくらでも伸ばし得られるが、砲門附近の風速と、弾着地点附近の風速とを考えてみても、かなりちがうのである。射程長ければ、命中率わろしである。そうではないか」

金博士は、鉛筆を握って、紙のうえに、しきりに弾道曲線を描きつつ喋る。

「ですが、金博士。僕はぜひともいい大砲を作りたいと思って、そのような初速の大きい電気砲を設計したのです。一発撃ってみて、命中しなければ、二発目、三発目と、修整を加えていきます。十発のうち、二発でも一発でも命中すれば、しめたものです」

「そういう公算的射撃作戦は、どうも感心できないねえ。なぜ、そんなに焦せるのであるか。もっと落着いて、命中しやすい方針をとってはどうか。ロッセ君、あなたの話を聞いていると、聞いているわしまで、な

んだかいらいらしてくる。それでは、戦闘に勝てない。ロッセ君、あなたは日本人だというけれども、あなたの電気砲設計の方針は、日本人的ではないですぞ。それとも、近代の日本人は、そんなにいらいらして来たのかな」

色眼鏡（いろめがね）の底に、金博士の眼が光る。

ロッセ氏は、次第（しだい）に沈痛（ちんつう）な表情に移っていって、しきりに唇を嚙（か）んでいる。私は、それをとりなそうにも、いうべき言葉を知らなかった。――ロッセ氏が、或る秘（ひ）め事（ごと）を、ここで告白するのでなければ、どうにもならないのであった。

しばらく、息づまるような沈黙が、金博士の書斎に続いたが、やがて博士は、やおら椅子から立ち上って、室内をこつこつと歩きだした。

「ねえ、ロッセ君」

「はあ」

「わしは君に、一つのヒントを与える。砲弾の速度を、うんと低下させたら、どんなことになるか」

「射程が短縮されます。技術の退歩（たいほ）です。ナンセンスです」

「いや、わしのいっているのは、射程は、うんと長くとるのだ。ただ砲弾の速度を、極（きわ）めて遅くするのだ。

そして命中率を、百パーセントに上げることが出来る。それについて、一つ考えてみたまえ。解答が出来たら、また訪ねてきなさい、わしは相談に乗ろうから」

「砲弾の速度を下げるのは、ナンセンスですが……とにかく折角（せっかく）のおすすめですから、一つ考えて来ましょう」

「そうだ。そうしたまえ。それが、うまくいくようなら、あなたの企図（きと）している英国艦隊一挙撃滅戦（えいこくかんたいいっきょげきめつせん）も、うまくいくだろう」

「えっ、なんですって」

「いや、あなたの懐中（かいちゅう）から掏（す）った財布（さいふ）をお返しするよ。

これは上から届けて来たものだが、いくら暗号（あんごう）で書いてあるにしても、英艦隊撃滅作戦の書類を中に挟（はさ）んでおくなんて、不注意にも、程がある」

3

外へ出ると、ロッセ氏は、大昂奮（だいこうふん）の面持で、私を捕（とら）えて、放そうとはしなかった。

「ねえ、綿貫（わたぬき）君。われわれは、もっと語ろうではない

か。素敵(すてき)なブランデーをのませる家を知っているから、これからそこへ案内しよう」

私は、初めから覚悟をしていたので、ロッセ氏のいうがままに、ついていった。

ホテル・クナンの、しずかな酒場(さかば)の片隅(かたすみ)に、ロッセ氏は、私を連れていった。

「この卓子(テーブル)は、僕の特約の席なんだ。では、お互いの健康を祝(しゅく)して……」

と、ロッセ氏は、琥珀色(こはくいろ)の液体の入ったグラスを高くさしあげて、唇へ持っていった。

「ふう、これでやっと落着いた。金博士も、ひどいと

ころを素破(すっぱ)ぬいて、悦(よろこ)んでいるんだねえ。宿敵艦隊(しゅくてきかんたい)の一件が、あそこで曝露(ばくろ)するとは、思っていなかった」

「まあいいよ。私も、すこし独断(どくだん)だったけれど、あなたを早く、博士に紹介しておいた方がいいと思ったもんだから、黙って連れていったんだ」

「ああ、金博士は、驚異(きょうい)に値(あたい)する人物だ。一体あの人は、中国人かね、それとも日本人かね」

「そのことだよ」

と、私は、グラスの酒を、きゅうとのみ乾(ほ)して、

「一体、金という名前は、中国にもあるし、日本人にもある。それから朝鮮にもあるんだ。もちろん満洲に

もあることは、君も知っているだろう。ところで博士は、その中の、どこの人間だか知らないといっている。博士は捨児（すてご）だったんだ。たしかに東洋人にはちがいないが、両親がわからないから、日本人だか中国人だか分らないといっている」

「赤ちゃんのときは、何語を話していたのかね」

「それは広東語（カントンご）だ。もっとも、博士がまだ片言（かたこと）もいえないときに、広東人の金氏が拾い上げて、博士を育てたんだからねえ、赤ちゃんのときに広東語を喋（しゃべ）ったのは、あたり前だ」

「ふしぎな人物だ。そして、あの穴倉（あなぐら）の中でなにをし

ているのかね」

「博士は、科学者だ。いや、もっと説明語を入れると、国籍のない科学者だ。国籍のない人といっても、ユダヤ系というわけではない。博士は曰く、わしは国籍こそ無けれ、あくまで東洋人だといっている」

「で、博士は一体、毎日どんなことをやっているのか」

「博士は、なんでも、気に入った科学をとりあげて、どんどん研究を進めている。今は、宇宙線と重力との関係を研究しているが、今までにも、たくさんの発明がある。その中で、かなり古臭くなった発明を、方々の国に売って、莫大な金を得ている。博士の資産は、

何百億円だか見当がつかない。が、それよりも驚異に値するのは、博士の自主的研究は独得なる発展を遂(と)げ、今世界中で一等科学の進んだアメリカや、次位(じい)のドイツなどに較(くら)べると、少くとも四五十年先に進んでいると、或る学者が高く評価している。だから、博士は、科学に関しては、世界の人間宝庫(にんげんほうこ)であるともいわれている」

私が最大級の讃辞(さんじ)を博士に捧(ささ)げていると、ロッセ氏は、そうかそうかと、ペルシャ猫(ねこ)のように澄(す)んだ瞳(ひとみ)をくるくるうごかして、しきりに感服(かんぷく)の面持(おももち)だった。

「だから、博士がうんといえば、あなたの設計した電

気砲も、博士の秘密工場の手で実際に作ってくれるだろう。そうすれば、あなたの念願している英艦隊（えいかんたい）の撃滅（げきめつ）のことも――」

「いや、博士は、初速の速い電気砲が気に入らないらしい。むしろ、速度の遅い、そして射程の長い砲弾を考え出せといわれたが、僕には、何のことだか分らないのだ。なぜなら、速度を遅くすることと、射程を長く伸ばすこととは、互いに相傷（あいきず）つける条件なんだからねえ」

「うむ、まるで謎々（なぞなぞ）だね」

「そうだ、謎々だ。それも解答のない謎々を出題され

たような気がする。博士は、ひょっとしたら、僕をからかったのかもしれない」

「そんなことはないよ。博士は、からかうなんて、そんな人のわるいことはしない。ああまで真剣で、大真面目なんだ。謎々をかけたにしても、博士は必ずその解答のあることを確めてあるのだと思う」

「そうかなあ。速度の遅くて、射程の長い、そして命中率百パーセントの砲弾！　そんなおそろしいものが、この世の中にあるとは、どうしても思われないが……いや、僕たちは、既成科学に対し、すっかり囚人になっているのがいけないのかもしれない」

ロッセ氏は、そういって、ぶるぶると身顫(みぶる)いをすると、急いでグラスを唇のところへ持っていった。

4

私たちが外に出たときは、夜もだいぶん更けて、さすがの南京路(ナンキンろ)も、人影が疎(まば)らであった。

二人は、アルコールにほてった頬を夜風に当てながら、別に当てもなく、路のあるままに、ぶらぶら歩い

ていった。私たちの話題は、やはり金博士と、そして博士よりロッセ氏に与えられた奇怪なる謎々とに執着していた。

それはもう、四五丁も歩いた揚句のことだったと思うが、ロッセ氏は、急に両の手を頭の上にのばし、拳固をこしらえて、まるで夜空に挑みかかるような恰好で、はげしく振り廻しはじめた。たいへん昂奮の様子である。

「おい、ロッセ君。一体、どうしたのか」

「うん。やっぱり、われわれは、金博士に騙されたんだ。あんなばかばかしいことが出来てたまるものか。

砲弾が低速で走れば、たちまち落ちるばかりではないか。高速であればこそ、遠いところへも届く」

「それはそうだね」

「あの金博士の意地悪め。僕は、英艦隊を一挙にして撃沈したいため、うまうまと博士の見え透いた悪戯に乗せられてしまったんだ。ちくしょう、ひどいことをしやがる」

「……」

ロッセ氏は、天に向って、しきりに博士の名を呪いながら、停っては歩き、そして又停っては歩きした。よほど口惜しそうだった。

私は、博士のことを、そんな人物だとは思わないが、ロッセ氏から、のろのろ砲弾についての討論を聞いているうちに、だんだんと氏のいうところも尤（もっとも）だと思うようになった。

「なるほど、反対条件だねえ」

「博士よ、豚に喰（く）われて死んでしまえ」

「まあ、そういうな。背後（うしろ）をふりかえってから、ものをいって貰おうかい」

ふしぎな声が、とつぜん、私たちのうしろから聞えたので、私ははっと思った。

「誰だ？」

「あっ！」
生れてからこの方、私はこんなに愕(おどろ)いたことは初めてだった。悲鳴をあげると共に、私は愕きのあまり、鋪道(ほどう)のうえに、腰をぬかしてしまった。なぜといって、私が振り返ったとき、そこには声をかけた筈(はず)の誰もいなかった。しかし何物も居ないわけではなかった。私は、まっ黒の、大きな筒(つつ)のようなものが、私の背中にもうすこしで突き当りそうになっているのを発見して、愕いたのである。それは、どう見ても、口径(こうけい)四十センチはあると思う大きな砲弾であったのである。
「どうだ。この砲弾が見えるかね」

砲弾が、ものをいった。ふしぎな砲弾であった。そういいながら、砲弾は、私の鼻先を掠めてそろそろと向うへ、宙を飛んでいった。大体地上から一メートルばかり上を、上から見えない針金で吊られたかのように落ちもせず、すーっと向うへいってしまった。そして最後に、私は、その砲弾が辻のところを、交通道徳をよく弁えた紳士のように、大きく曲ったのを見た。そして間もなくその怪しい砲弾は、ビルの蔭に見えなくなってしまった。なんというふしぎなものを見たことであろうか。夢か？　断じて夢ではない。

ふと、傍を見ると、ロッセ氏も、鋪路のうえに、

じかに坐っていた。氏も、私と同様に、腰を抜かした
のにちがいない。
「見ましたか、今のを……。ねえ、ロッセ君」
私は、氏の肩を、ぽんと叩(たた)いた。
するとロッセ氏は、とつぜん吾れにかえったらしく、
ふーっと、鯨(くじら)のようにふかい溜息(ためいき)をついた。そして
私に噛(かじ)りついたものである。
「ロッセ君、しっかりしたまえ」
「見ました、たしかに見ました。しかし、僕は気が変
になったのではないだろうか。大きなまっ黒な砲弾が、
通行人のように、落着きはらって、向うへいったのを

見たんだからね」
「それは、私も見た」
「砲弾が、ものをいったでしょう。あの声は、たしかに金博士の声だった。金博士が、砲弾に化（ば）けて通ったんだろうか。わが印度（インド）では、聖者（せいじゃ）が、一団（いちだん）の鬼火（おにび）に化けて空を飛んだという伝説はあるが、人間が砲弾になるなんて……」
「ほう、なるほど。あの声は、金博士の声に似ていた。それは本当だ」
私は、ロッセ氏には答えず、思わず自分の膝を叩いた。

5

金博士秘蔵(ひぞう)の潜水軍艦弩竜号(どりゅうごう)の客員(きゃくいん)となって、中国大陸の某所(ぼうしょ)を離れたのは、それから、約一ヶ月の後だった。

もちろんロッセ氏も、共に博士の客であった。

弩竜号は、おどろくべき精鋭(せいえい)なる武装船(ぶそうせん)であった。総トン数は、一万トンに近かったが、潜水も出来るし、

浮かべばちょっとした貨物船に見えた。弩竜号に関しては、ぜひ報告したい驚異がいろいろあるが、本件の筋にはあまり関係がないから、ここには記さない。

弩竜号は、大陸を離れて五日目には、灼熱（しゃくねつ）の印度洋（インドよう）に抜けていた。その日のうちに、セイロン島の南方二百浬（カイリ）のところを通過し、翌六日には、早やアラビア海に入っていた。

「ソコトラ島とクリアムリア群島との、丁度中間（ちょうどちゅうかん）のところへ浮き上るつもりです」

と、金博士が、地図の上を指でおさえながらいった。

「博士、もっと、例の反重力弾（はんじゅうりょくだん）のことについて、話

をしていただきましょう」

「ああ、あなた方を愕かしたあのものをいう、のろのろ砲弾のからくりのことかね。印度洋へ入ったら、いう約束だったから、それでは話をしようかね。からくりをぶちまければ、他愛もないことなのさ。砲弾が、ものをいったのは、砲弾の中に、小型の受信機がついていて、わしの声を放送したんだ」

「それは、もう分っています。それよりも、なぜ、あのように低速で飛ぶのですか。落ちそうで、一向落ちないのが、ふしぎだ」

「それは、大したからくりではない。重力を打消す

仕掛（しかけ）が、あの砲弾の中にあるのだ。これはわしの発明ではなく、もう十年も前になるが、アメリカの学者が、ピエゾ水晶片（すいしょうへん）を振動させて、油の中に超音波（ちょうおんぱ）を伝えたのだ。すると重力が打消され、油の中に放りこんだ金属の棒が、いつまでたっても、下に沈んでこないのであった。その話は、知っているだろう」

「ええ、その話なら、知っています」

「そのアメリカ人の着想（ちゃくそう）に基（もと）いて、わしが低速砲弾に応用したんだ。つまり、砲弾の中に、それと似た重力打消装置（じゅうりょくうちけしそうち）がある。もし重力を完全に打消すことができたら、砲弾は、地球と同じ速さで、地球の廻転

と反対の方向に飛び去るわけだが、それはわかるだろう」
「なるほど、なるほど」
と、私も前へのり出した。
「しかし、重力をそれほど完全に打消さず、或る程度打消せば、それに相当した速度が得られる。低速砲弾においては、ほんのわずか重力をうち消してあるばかりだ。それでも、途中で地面に落ちるようなことはない」
「それはいいが、砲弾の飛ぶ方向は、どうするのですか」

ロッセ氏が、息をはずませて訊く。

「それは飛行機や艦船と同じだ。舵というか帆というか、そんなものをつけて置けば、いいのだ。操縦は遠くから電波でやってもいいし、砲弾の中に、時計仕掛の運動制御器をつけておいてもいい。——それはまぁ大したことがないが、わしの自慢したいのは、この砲弾は、はじめに目標を示したら、その目標がどっちへ曲ろうが、どこまでもその目標を追いかけていくことだ。だから、百発百中だ」

「ほう、おどろきましたな。目標を必ず追いかけて、外さないなんて、そんなことが出来ますか」

「くわしいことは、ちょっといえないが、軍艦でも人間でも、目標物には特殊な固有振動数というものがあって、これは皆違っている。最初にそれを測っておいて、それから砲弾の方を合わせて置けば、砲弾は、どこまでも、目標を追いかける。先夜、あなたがたを追いかけていったのも、その仕掛けのせいだ。尤も、君たちに会えば、用がないから、わしのところへ戻ってくるように調整しておいたのだ。これはわしの自慢にしているからくりじゃ」

「なるほど。そんなことになりますかな」

と、感心しているとき、監視部から電話がかかって

きた。敵艦隊が遂に現れたというのである。博士は、すぐさま弩竜号に、浮揚（ふよう）を命じた。

「二百発の低速砲弾を、敵の四隻（せき）の巡洋戦艦（じゅんようせんかん）に集中する。一艦につき五十発ずつだ。五十発の命中弾をくらえば、どんな甲鈑（かんぱん）でも、蜂（はち）の巣になるじゃろう。しかも、第一発が命中した個所（かしょ）を、次の第二弾が又同じ個所を狙（ねら）って命中するのだから、まるで、錐（きり）でボール紙の函に穴をあけるようなものじゃ。まあ、見ていたまえ」

博士は、テレビジョンの映幕（スクリーン）を見ながら、八門（もん）の四十センチ砲の射撃を命じたのであった。二百発の砲弾

は、まるでいたずら小僧（こぞう）の群（むれ）を襲う熊蜂（くまばち）の群のように、敵艦にとびついていったが、まことにふしぎな、そして奇怪な光景であった。それから十五分ほどたって、四隻がてんでに舷側（げんそく）から火をふきながら、仲よく揃って、ぶくぶくと波間（なみま）に沈み去ったその壮観（そうかん）たるや、とても私の筆紙（ひっし）に尽（つく）し得るものではなかった。

ロッセ氏は、映幕（スクリーン）の前に、金博士の手を握り、子供のように慟哭（どうこく）した。余程（よほど）嬉（うれ）しかったものと見える。無理もない、それは確実に、印度民族奮起（ふんき）の輝かしき序幕を闘いとったことになるのであったから。

しかしその日の新聞電報は、地中海から廻航中（かいこうちゅう）の

英艦隊が、例によってドイツ潜水艦のため、多少の損傷を蒙ったとだけ報ぜられ、四隻とも即時撃沈されたことにも、また金博士の弩竜号が活躍したことについても、全然触れていなかったのは、どうしたわけか、私には一向分らないところである。

底本：「海野十三全集　第10巻」三一書房
1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行
初出：「新青年」
1941（昭和16）年4月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：tatsuki
校正：まや
2005年5月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。